

## スマートモブズ、ポケベル少女、ながらモビリズム

IT時代の未来像を早くも1980年代に予見したラインゴールドが、2000年東京渋谷ハチ公前での携帯電話利用シーンに「啓示」を受け、世に問うたのが「スマートモブズ——〈群がる〉モバイル族の挑戦」(2002;2003)である。書名は、英語のmob(暴力的な群衆)と、ケータイmob(=mobile)とが掛言葉として用いられている。

彼によれば、携帯電話やPDAなど、常時ネット接続可能な小型情報機器が大眾に普及することで、見知らぬ者同士の出会いとネットワークから、新しい形の協力体制が始まり、新社会秩序が生まれる。1980年代のパソコン、1990年代のインターネットに匹敵する2000年代のモバイル・メディア革命によって、暴力的な群衆でさえ賢明(スマート)になり、場合によっては暴徒化する。社会現象面で先行する日本の現実を追認しつつ、理論化した技術/社会論である。

IT第一人者としての洞察には学ぶべき点が多いが、社会理論的にはナイーブである。すなわち、IT論議を差し引くと、その図式は19世紀フランスの貴族思想家、トクヴィルが『アメリカの民主政治』(1835/40)で説いた、平民群衆が民主主義を手にする事で賢明にもなり、より暴力的にもなるという構図に酷似する。一言でいえば、テクノクラートの(技術決定論的・エリートの)大衆社会論の側面が強い。古くはタルドやル・ボンから、スメルサーに至る「集合行動」論のIT版でもある。また個のレベルにない特性が、集団レベルで初めて発現する「創発特性」論は、マートン『社会理論と社会構造』(1949)に由来する。

「モバイル時代の鍵は、ハードやソフトよりも社交実践(ソーシャル・プラクティス)にある」というラインゴールドの主張は、ある意味で自己矛盾的だ。すなわちIT以前から、ジョンソンや嶋本のメールアート実践(1955~)は、ハガキ1枚でグローバルな匿名の協力体制を築き、リップナックとスタンプス「ネットワーク——ヨコ型情報社会への潮流」(1982;1984)のネットワーク論は、すでに理論・実践ともに完成していた。あくまでITは、そうした先端的「社交実践」の大衆化に向け、「とどめの一撃」を与えたにすぎない。

●**ポケベル少女** かたや1995年、大阪心斎橋でのポケベル利用シーンに「啓示」を受けた藤本『ポケベル少女革命——メディア・フォークロア序説』(1997)の場合、ラインゴールド同様の技術/社会革命論を展開しつつも、思想的背景が大きく異なっていた。すなわち、家父長的家族・学校・会社・国家といった近代システムの覇権(ヘゲモニー)によって抑圧されてきた女子中高生が、1990年代初頭、初めて常時ネット接続可能なポケベル(ベイジャー)を手にする事でエンパワー

され、電子ネットワークの中に自分たち固有の「居場所(テリトリー)」を構築する。同時に彼女たちは、豊かな社会の余剰資源を動員しつつ、現行の硬直したシステムを脱構築し、近代以前のゆるやかな民衆知やネットワークを復活させる点で、フォークロア主義とフェミニズムに立脚していた。従来、経済的に無力で、親や教師に依存してきた「弱者」としての少女が、ポケベルとそれに付随するネットワークを通じて、匿名者同士の「社交実践」を先取りし、逆説的な形でプレモダン的な「电脑版娘宿」を実現する。その構図の立脚点は、富田・藤本他『ポケベル・ケータイ主義!』(1997)、伊藤・松田他『ケータイのある風景——テクノロジーの日常化を考える』(2005;2006)にも継承されている。

●**ながらモビリズム** そもそもモバイルという語は、藤本『モバイルの文化社会学——移動体300年史における家→動→体のメディア変容』(1998)によると、①移動可能、②携帯可能、③動員可能、④移り気な、⑤常に揺れる(芸術用語のモビール)⑥歩行を基本にした、低速で運動する「モビリズム」、⑦マルチタスク/マルチメディアかつ、分散的/並列的処理を行う「ながら」思考・行動などの含みをもつ。すなわち、ラインゴールドが掛言葉とした2つの意味以上に多層的な意味空間をもつ。その広がりの中では、移り気で居所定まらない「群衆」と、携帯可能なメディアという両概念は、結び付きやすい近傍関係にある。両者の意味的近接性は、モンゴル遊牧民やマサイ族など移動し続けるノマド(遊牧民)の社会で、固定電話より前に携帯電話網が普及しがちな傾向からも証明されるだろう。

そして今日、ポケベル・携帯電話を始めとするモバイル機器は、技術/社会論の文脈だけでなく、芸術・文化論の文脈でも議論を巻き起こしている。藤本(1998)の⑥と⑦を併せた「ながら+モビリズム」は、当初、日本の若者におけるポケベル・携帯電話利用の固有の特徴と考えられた。すなわち、日本の携帯メディアには、自分の「居場所」を確保する手段「テリトリー・マシン」の側面だけでなく、芭蕉や子規の俳諧に匹敵する文芸復興運動の手段「リテラリー・マシン」(ネルソンの同名著書、1981;1994)という側面がある。その証拠に、自転車に乗りながら携帯電話に目をやる日本の若者の姿は、薪を背負って歩きながら読書する二宮金次郎像という伝統的な「勤勉のアイコン」と酷似している、とみなせよう。

しかしながら、美術批評家ヒョース『アジア太平洋におけるモバイル・メディア——モバイルであることのジェンダーとアート』(2008)によれば、こうした「ながらモビリズム」は、新しい芸術・文化様式として、日本固有の文脈を超えてグローバルに展開可能であるという。「ポケベル少女革命」に始まる「文化(小)革命」は、渋谷・原宿発ストリート・ファッションの「かわいい」革命と相まって、新しいムーブメントを世界に提起している。その意味で、「スマートモブズ」は単なる技術/社会革命にとどまらない、「キューティモブズ」という美的感性や美学の革命でもあったといえよう。

[藤本憲一]

(日本社会学会編『社会学事典』丸善2010)